

# 見慣れた風景からの未来の発見 見慣れた風景からの未来の発見

～山内地区の風景から糸満市の風景の再発見～

2012/9/5 崎山正美



山内地区の杉山と水田と黒瓦の屋並み

## 1. 杉山の風景

私たちが交流した山内地区は甲賀市土山町の一つの地区で近年耳にする中山間地に位置づけられ、村の風景は杉山と水田と伝統的家屋からなる集落で構成されます。山のほとんどが杉山で広葉樹はほとんど目にすることがありません。

日本の戦後は、都市地区でも農村地区でも歴史的に大きな変化がありました。都市地区では戦災復興事業が行われ、空襲で焼け野原となった市街地では新たな街づくりが進められてきました。農村では農地改革が行われ、小作農の人たちに農地が解放され農業に新たな息吹が生まれました。主力産業では石油石炭をエネルギー源とする重化学工業への転換が行われてきました。その頃、林業は戦災復興用の資材として材木の生産のた

めの植林事業を拡大していきました。これまでのエネルギー源が薪・炭から石油、石炭、ガスに転換されていく時代にあって、里山と呼ばれる多様性を有する薪炭林の多くが杉の造林地に変わっていきました。

## 2. お山の杉の子とヒヤミカチ節

少し余談になりますがその頃の世相を反映する「お山の杉の子」という学校唱歌がありました。それは杉植林にも大きく貢献した歌であり。また戦後の人々を元気づけた歌でもあります。ここに紹介しておきましょう。

一 むかしむかしの そのむかし

権の木林の すぐそばに

小さなお山が

あったとき あったとき

まんまる坊主の 禿山は いつでもみんなの 笑いもの

「これこれ杉の子起きなさい」

お日さまニコニコ 声かけた 声かけた

私が小学生の頃には歌っていましたし、運動会では遊戯にもなっておりましたので年配の方は記憶している方もいるでしょう。この歌が生まれた背景を探ってみますと実に世相を反映した歌であることが分かりました。この歌はもともと昭和19年11月「小国民文学」に発表された軍事保護院献納小国民歌だと言われています。目的が戦意高揚ですから、今では驚きです。しばらくして終戦となり、その後GHQのもとで歌詞の変更が行われ戦後の小学校でも歌われるようになりました。戦前と戦後の歌詞の違いを比較してみましょう。

戦前	戦後
三 「こんなチビ助 何になる」 ビックリ仰天 杉の子は 思わずお首をひっこめた ひっこめた ひっこめながらも 考えた 「何の負けるか いまにみろ」 大きくなって 国のため お役に立って みせまする みせまする	三 「こんなチビ助 何になる」 ビックリ仰天 杉の子は 思わずお首をひっこめた ひっこめた 引っ込めながらも考えた 「何の負けるか いまにみろ」 大きくなって 皆のため お役に立ってみせまする みせまする
五 大きな杉は 何になる 兵隊さんを運ぶ船	五 大きな杉は 何になる 本箱 お机 下駄 足駄

傷痕の勇士の寝るおうち 寝るおうち お船の帆柱 梯子段 うれしや まだまだ 役に立つ 役に立つ	おいしいお弁当 食べる箸 鉛筆 筆入れ そのほかに たのしや まだまだ 役に立つ 役に立つ
六 さあさ 負けるな 杉の木に 勇士の遺児なら なお強い 体を鍛えて がんばって がんばって 今に立派な 兵隊さん 忠義孝行 一筋に お日様出る国 神の国 この日本を護りましょう 護りましょう	六 さあさ 負けるな 杉の木に すくすくのびろよ みな伸びろ スポーツわすれず がんばって がんばって すべてに立派な 人となり 正しい生活 ひとすじに 明るい楽しい このお国 わが日本をつくりましょう つくりましょう

実に戦前と戦後の価値観の違いをみせつける歌詞ですが、その歌のすべてを葬り去らずに歌詞を変更して戦後の小学校で歌われてきたということはこの歌に多くの人々を励ます力があつたということなのでしょう。

沖縄にも戦災からの立ち上がりを励ます歌がありました。それが「ヒヤミカチ節」です。この歌は戦後の沖縄でよく歌われ「お山の杉の子」と同じく小学校の運動会では遊戯としても披露されました。その歌詞を見てみましょう。

- 一 名に立ちゆる沖縄 宝島でむぬ 心うち合わち う立ちみしより  
(ヒヤ ヒヤ ヒヤヒヤヒヤ ヒヤミカチうきり)
- 二 稲粟ぬうなり 弥勒世ぬしるし 心うり合わせ 気張りみしより
- 三 がくやない秀らさ 花や咲ち美らさ 我した此ぬ沖縄 世界に知らさ
- 四 人ぬ取ゆる年ぬ んぱんばぬなゆみ うびじらに取たさ 六十ばんじゃ
- 五 我んや虎でむぬ 羽ちきていたぼり 波路パシフィック 渡ていなびら
- 六 七転びころで ヒヤミカチ起きり 我した此ぬ沖縄 世界に知らさ

さて、このヒヤミカチ節は、1953年ハワイから沖縄に帰郷した平良新助さんがふるさとの惨状を目の当たりにして復興への祈りを込めてたちまちのうちに作曲したとのことです。作詞者は「王府おもろ」の伝承者として名を知られた山内盛彬さんです。

この二つの歌には戦争に打ちひしがれた人々に「がんばれ！」と激励する強い心情が込められています。この共通性を感じながらもヒヤミカチ節には、よりゆるりとした平

和観、世界観を感じます。その頃の沖縄は、本土よりもよりひどい状況であったにも関わらず、未来を見る目はかなり豊かです。沖縄の戦後史に名を残す伝説的漫談家（本職は歯科医）の「舞天（ブーテン）」さんが各地を巡って「命のぐすーじさびら」といって人々を元気づけたのと同じ心意気を感じます。また、伝統に忠実で頑固と思われかねない山内さんですが歌詞には「んぱんぱ（いやいや）」という幼児語や「パシフィック（太平洋）」という英語も用いるなど随分と脳天気な明るい歌ではありませんか。戦後沖縄の農村からは、南米に移民が行われましたが皆この歌に激励されて残る親兄弟の事を思いながら故郷を後にしたことでしょう。この歌は実に方々で歌われました。結婚式の余興でも良く披露され、確かフォーシスターズの持ち歌であったように思います。この歌には学校バージョンがあって「我らみな 日本の子 沖縄の子」というフレーズがあったと記憶しています。当時の沖縄人々の祖国復帰への渴望が思い出されます。

### 3. 杉の植林政策の成果



杉山と水田を分ける電流が流れる柵

戦後の木材需要を見越して日本の山という山が杉山に変わっていきました。造林業は父親が植え付けて子や孫が伐採し金に換えるという2代、3代に渡る遠大な職業です。植え付けから伐採するまでの時間は最低でも50年以上の時間を必要としますので1950年に植え付けられたものは2,000年頃から伐採期に入る予定でした。しかし、その後の林業は安い外材に押され、全く振わなくなりました。林業家は後継者もなく杉山は間伐されることもなく荒れるにまかせ、結局は、豪雨時には山崩れの原因となったり、金を生まない山は日本列島改造計画によってゴルフ場が変わっていきました。さらに杉の単純林は動物たちの生息を狭め、既にその地域から消えていった種類もあります。近

年、熊が人里に下りてきたり、鹿が農作物を食い荒らしたりすることには杉だけの単純な植生にも原因があります。また杉花粉による花粉症の被害も杉林が手入れされなくなった頃からニュースになったような気がします。

私たちを案内してくれたOさんはこうつぶやきました。「政策が間違っていたのでしょいかね」と。政策にもとづく事業の創設と執行は実に強大な力を持ちます。全国各地の山を見るにつけよくも日本の国土をここまで杉山に変えたなと驚かされます。

この拡大造林政策については以前に「伝えておきたいこと②」で紹介した四手井綱英さん（京都大学名誉教授）が早くから批判をしていました。それに対して同僚の学者や官僚は逆に四手井さんを冷たくあしらったようですが、その人たちは今の杉山の状況をどう説明できるのでしょうか。政治家や行政マンには、組織の都合ではなく現場から物を言い政策をつくっていくことが求められますが、ここにも国全体としての政策判断よりも省庁や一部の人の都合を優先する弊害が浮き彫りにされています。そんな経緯はあっても今後杉山をどうしていくかは日本の国土保全や環境基盤の視点からもまた、「人間の土地」としての中山間地を考える上でも大変重要なテーマです。

#### 4. ツバメとの共生



杉本さんの納屋で子育てするツバメ

この時期、山内地区黒滝の杉本さんのお宅の納屋の扉は常時開放されています。理由は納屋の中にツバメが巣をつくり、子育てをしているからです。ツバメのひなの糞は巣の外に出されます。したがって巣の下は糞だらけになりますが、杉本さんのお宅では土間が汚れないようにと新聞紙が敷かれていて、毎日取り換えているようでした。決して汚いからとツバメの巣を壊そうとはしません。それよりも我が子のように巣立ちを見守

っているようです。その光景は仏教の生き物を大切にすることを教えるためなのでしょう。そこには日本人の共生の思想が今も息づいていることを感じます。それが多様性のある社会や国土を再生する原動力になるものと思いました。

## 5. 土山の魅力と可能性



山内地区の農家はどれも整理・整頓がされていて美しい

山内地区は、林業に変わる産業を見つけようと取り組みを始めました。その一つが農家民泊でした。米須の子供たちの初日の宿泊先は民泊でした。それは大変好評で、子供たちに感想を聞いたところ家族的触れ合いが良かった、お米がおいしかった、お風呂が珍しかったとのこと。全体としての満足度を聞くと「まあまあかな」という感想でした。この言葉の裏には旅に刺激性を求める無意識が働いているようにも思えますが私たちは、この「まあまあかな」という感想をどう捉えましょうか。私は「まあまあかな」という日常的緩やかさの中に新たな可能性があるものと思っています。

僭越ながら私の感想を箇条書きにしますと次の通りです。

- ・清掃、整理整頓が当たり前のように行われていて暮らしの風景が美しい
- ・黒瓦の伝統的家屋の屋並みは、風景計画などと取り立てて言う必要がないほどに美しい村である。
- ・山の緑は濃いがすべて杉山というのが若干異様でもある。
- ・清流は魅力的だとも言えるが川に多様性を感じない（渓流域の川は貧栄養なので生物の種数は限られているという理解はあるつもりですが、それでも川の多様性は低いと思いました）。意外にも人工のにおいを感じる。あれでは川の生き物も単純化するのではないか。

・おもてなしをしてくれた地域の人々に思いやりを感じる。それがこの村の未来づくりにつながるのではないか。

地域の発展はプラスの面もマイナスの面も咀嚼して初めてかなえられるものです。しかし現実にはプラスの面は単に自慢話に終わり、マイナスの面は改善に向けての議論の舞台に上がらないというのが我が糸満や県内各地で感じてきたことでした。

山内地区で感じたことを整理すると山内地区にとっても糸満にとっても課題と可能性が見えてくるようです。まず課題は山も川も単純な環境になっていることです。一方先達たちは多様な環境やそこでの仕事の記憶を依然として宿しているということです。また、神社の杉の老樹や戦前からの堂々たる家屋が今に残るということは、この現実と過去の記憶をつなげ、良い方向を目指し始めると、まれ人にもこの土地に住む人にも魅力ある土地となり、志のある若い人たちも住める村になるのではないのでしょうか。退屈という表現がなされる一方であるがままに美しい風景の中で時間を過ごしたいという自律的意志をもつ人々も確実に増えてきているのではないのでしょうか。その時間の過ごし方をどう提供できるかが美しい基盤を既に有している中山間地域再生の鍵ではないかと思います。

## 6. 美しい川とは何か



この川はもっと美しくなれるはずだ

私たちが川の復権の活動をしている頃、「美しい川とは何か」という問いかけがありました。美しいという概念は人の経験や知識や価値観によってもかなり異なります。そこに共通の目標像を示せないのが川の運動上の悩みでもありました。その悩みに対して実に明快な解答を示したのが日本における近自然河川工法の導入者であり、高知県の西日本科学研究所長の福留脩文さんでした。彼はこう言いました「美しい川とは多くの生

命を宿している川である」と。実に奥の深い解答です。日本では美しい自然を「花鳥風月」と表現します。それは、その地域の自然が大事にされて初めて現れてくるものです。そして人間を含め多くの生き物たちの登場によって一つの物語として織り込まれてドラマティックに繰り広げられるものです。これは徒然草や枕草子に見られるように日々の暮らしの中から発見されるものであって、デイズニーランドのようにバーチャルで、誇張された、刺激的な物語とは対極にある美です。

今、農家民泊は児童生徒の体験学習として注目され活用されていますが、意外にも農家民泊は物見遊山を卒業した成熟した大人の旅のプログラムかもしれません。そろそろ大人のためのプログラムやおもてなしの空間づくりを研究していく必要があります。勿論これからの新たな産業として。

さて、我が糸満の民泊にはどんな可能性があるのでしょうか。戦争で壊滅的打撃を受けたまちはたかだか67年の時間の蓄積しかありませんが意外にも資源は豊かです。しかし、まちやむらにはポイ捨ごみや不法投棄のごみが不法ではないかのように当たり前に散乱しています。それでも県は観光立県と言います。そして糸満の観光業関係者は、滞在型観光の推進を口にします。もし、今の状況で観光客が滞在しゆっくりとまちやむらを散歩するとごみの多さにたまげてしまうでしょう。観光を言う前に暮らしの中の美の造成が当たり前のこととして取り組まれる必要があります。それは観光政策である前に私たちの快適な暮らしをつくる政策のはずです。さらに豊かな生命が宿るまちづくり、豊かな環境づくり、豊かな海づくりであるべきでしょう。それが私たちの甲賀市土山町山内地区から学んだことでした。



「つながり」は山内地区でも重要なキーワード